

40

“ヒポクラテスの木” 2007

—コス島の“ヒポクラテスの木”の来歴と現状—

稲松 孝思

東京都老人医療センター 研究検査科・感染症科

現代の医療倫理学において、“ヒポクラテスのパターンリズム”を排して、“インフォームド コンセント：説明—納得に基づく自己決定”が重視される。標語として「ヒポクラテスは死んだ」、と言うことになる。医学のおごりの限界が指弾され、その権化として“ヒポクラテス”は殺されてしまったのである。しかし、「患者の事を思いやる事を第一にせよ」とか「医師は、自然という良医の臣でなければならぬ」などと言う、医の根幹をなす“ヒポクラテスの倫理”の全体を、そう安易に否定してしまって、医の立場を保てるのだろうか……。そのような思いを整理して、医師としての専門性を主張したいと思っているのだが、思いは錯綜している。崩壊もささやかれる医療の現状の中で、ギリシャ時代に、ヒポクラテスが若い医人に教えを垂れたという、プラタナス：“ヒポクラテスの木”の廻りをうろろするばかりである。日本国内の“ヒポクラテスの木”を辿りながら、エーゲ海のコス島の“ヒポクラテスの老樹”の事を気にかけていた。2007年の春に、コス島を訪ねることが出来たので、“ヒポクラテスの木”の来歴と、現状について報告したい。

2003年に出版された、MANOLIS S Kiapokasによる「HIPOCRATES OF COS」に“ヒポクラテスの木”についての記載がある。「3世紀の書物に、コスの人たちがプラタナスの木ノ下に、ヒポクラテスを偲んで、銅像をたてたという。それが今のプラタナスであるかどうかは判らない。1600年代のオスマントルコ占領下のコス島を訪れたフランス人旅行者の現在のプラタナスについての記録があるという。残されている図版としては、1783年にフランス人旅行者が書いたものが“ヒポクラテスの木”のはじめらしい。この樹がヨーロッパ最古の樹であり、世界で70本の古い樹の一つである」と書いてある。プラタナスの植物学的な寿命はせいぜい700年程度であり、現在の樹は何代目かの子孫らしい。

1966年に弘前大学の佐々木先生の撮影したものがネットに掲載されており (<http://hippo.med.hirosaki-u.ac.jp/~sasakin/nao-h/p101cos.html>)、私の見る事が出来た、もっとも古い写真である。堂々とした大樹の面影が伺われる。1978年に東大の緒方富雄先生が撮影された写真を、当時の秘書役の恒任直氏から頂いた。現地の観光案内書に載せられている写真は、1990年頃の写真と思われるが、正面からの写真の右端に若い木が見える。モスク側からの写真では、四阿の右側の老樹の方が背は高い。

2007年5月に観察した現状について述べる。直径10mに及んだ老樹の幹は、3/4以上は枯死しており、残りの1/4も巨大な空洞に穿たれ、朽ちた面には赤褐色の保護塗料が塗られている。大きく枝を広げた老樹は、鉄骨柱で支えられて、殆ど樹皮のみで立っている。老樹の朽ち果てた部分が生えていたとおぼしき一角に、幹の直径30cm位の若木が2本育っており、花や葉の形などは老樹と区別はつかない。ひこばえ（藁：シュート）の育ったものらしい。モスク側から見ると、“ひこばえ”の樹高はすでに老樹を凌駕している。ヒポクラテスの活動した時代から、およそ2400年、何度か“ひこばえ”の代替わりを繰り返してきたと思われる。現状の老樹は盛りを相当に過ぎて、次世代の藁（ひこばえ：シュート）が老樹をしのぎつつある状況と思われた。

医の道が乱れたときに、遠くはケルススの時代に、近くは第二次世界大戦中の医師の行動への反省として、不死鳥のように蘇ってきた“ヒポクラテス”であり、現状の医療崩壊再建の支柱となることを願っている。そのよすがとして、「ヒポクラテスの木」のことを考えていたい。